慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	序
Sub Title	
Author	国分, 良成(Kokubun, Ryosei)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.3 (2010. 3) ,p.v- vii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100328--004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

法学部教授ならびに慶應義塾常任理事として慶應義塾の学問と教育の発展に尽くされるとともに、政府の重職につかれ日本の学問・研究発展にも手腕を発揮された薬師寺泰蔵教授が本年三月末日をもって退職される。薬師寺先生のご経歴は異色であり、華やかであった。いわゆる理系と文系の枠を超えた学際的視点で斬新な研究課題に取り組む研究者であった一方で、持ち前の明るさと決断の早さで組織を導く行政手腕もお持ちであった。日本の大学が今後ますます困難な時代の舵取りを求められることが予想されるなか、薬師寺先生が法学部そして慶應義塾を去られることは、大きな支えを失う思いである。薬師寺先生のおられる法学部教授会には安定感があった。先生にご意見を伺えば何事も解決できる、そのような重みが先生には漂っていた。

薬師寺という姓のルーツはその名の通り奈良にあるようだが、先生ご自身は東京で生まれ育った。先生は当時小金井にキャンパスがあった慶應義塾大学工学部電気工学科に入学された。ところがそこでエンジニアへの道は歩まず、東京大学教養学部に学士入学され、科学史および科学哲学を学ばれた。ここでも哲学者の道は取らず、フルブライト留学生として米国へ渡る。米国ではマサチューセッツ工科大学（ＭＩＴ）で学ばれ、日米自動車摩擦を政策科学の手法で分析した博士論文をまとめられた。当時親交のあったエズラ・ボーゲル教授（ハーバード大学）が「タイゾウはベストな逸材だった」と回想しておられるように、米国の大学でのポジションの打診もあったそうだが、日本への帰国の道を選んだ。

帰国された薬師寺先生は、当時、政策科学を日本で発展させるべく人材が集まっていた埼玉大学へ着任された。ここで行動論革命の影響を受けた政策科学の手法を用い、日米経済摩擦問題や日本の財政金融政策の分析に足跡を残された。その間、カリフォルニア大学バークレー校で米国カウンシル・オブ・ラーンドソサエティ招聘教授として研究する機会も持たれている。

平成三年（一九九一年）、工学部を卒業後二三年目にして法学部教授として慶應義塾に戻ってこられた。教授会での最初のご挨拶は「出戻って参りました」というもので、温かく迎えられたと記憶している。平成四年（一九九二年）四月から始まった研究会（ゼミ）は、薬師寺先生が独仏に在外研究に出られていたため、最初の三カ月を先生なしで過ごすことになったが、帰国後は教育と研究に全力を投じられ、その後薬師寺研究会は政治学科の看板ゼミのひとつとなった。理系出身である薬師寺先生の先見の明は、インターネットの利用であった。まだ三田キャンパスでは接続が確保されていなかった頃、副所長を兼務されていた国際大学グローバル・コミュニケーション・センター（GLOCOM）等に学生を連れて行き、積極的にインターネットを学ばせたという。

研究面では、昭和六三年（一九八八年）に発表された『テクノヘゲモニー―国は技術で興り滅びる―』（中公新書）が注目を集めた。それまで国際政治学ではほとんど注目されてこなかった技術に注目し、それが覇権（ヘゲモニー）の成立に中核的な役割を果たしているという主張は刺激的であり、その後の一連の技術と国際政治についての著作へとつながっていく。また、翌年に発表された『公共政策』（東京大学出版会）は、当時の政策科学の最新の知見を応用して政策を分析するための概念と手法を紹介したものとして版を重ねることになった。さらに、二五年以上に亘ってつきあってきた米国について分析した『無意識の意思の国アメリカ―なぜ大国は甦るのか』（NHKブックス）も評判となった。

ところが、こうした一連の研究が一段落した後の一九九七年、薬師寺先生は鳥居泰彦塾長のもとで学務担当兼

国際交流担当の常任理事に指名され、四年の任期を務められた。その間、薬師寺先生のご尽力で東館が造られ、現在のグローバルセキュリティ研究所（G-SEC）の設立にも中心的な役割を果たされた。

常任理事としての任を終えられると、法学部に戻るとともに、世界平和研究所の研究主幹も兼任される毎日を送っておられたが、またもや薬師寺先生から安住の道を奪う声がほどなくして上がった。小泉政権下の二〇〇三年、内閣府総合科学技術会議の常勤議員という重職に任命され、再び塾を離れた。六年以上にわたる任期中、バイオテクノロジーをめぐる研究の規制が注目されることになり、総合科学技術会議の生命倫理専門調査会会長として先生は難しい局面に立たされたという。その後の世界的な研究の潮流の変化からすれば、先生の決断は未来を見越したものであったといえるだろう。

慶應義塾常任理事としての四年間、そして総合科学技術会議常勤議員としての六年間は、薬師寺先生のお力を十分にお借りできなかったという点で、法学部にとっては残念なことであった。しかし、教育・研究・大学行政だけでなく、国の科学技術政策において中心的な役割を果たした同僚を持ったことは、われわれ法学部にとって名誉であり誇りである。

慶應義塾ご退職後も薬師寺先生には安住の道はないだろう。日本という国が理系と文系の融合を成し遂げた薬師寺先生の経験と知見を必要としているからである。先生のいっそうのご活躍とご健康を祈念して、本号を謹んで進呈させていただきたいと思う。

平成二二年一月

法学部長　国分良成